



# 教皇様の聲

# 11

# 247号

Libreria Editrice Vaticana, Citta  
del Vaticanoの転載許可済 2000

## キリストの要求

〔水曜日の一般謁見でのお話。〕

1 キリストとの出会いによって人間の生活は根本的に変化し、回心（ギリシア語でメタノイア）、つまり知性と心を深く改めることへ駆り立てられます。また、私たちが弟子としてふさわしく生きられるよう生活の交わりが確立されます。福音では、キリストに従う者の二つの姿勢が表わされています。一つはキリストと「共に行く」という姿勢、二つ目は導いてくださる方の足跡と方向に従って「後に続いて歩く」という姿勢です。これは弟子の姿を表わすものであり、様々な方法で示されます。あるものは、相変わらず大衆のように漠然としばしば表面的にキリストについて行きます。（マルコ3・7、5・24、マタイ8・1、10、14・13、19・2、20・29参照）罪人がいます。（マルコ2・14～15参照）いくたびか述べているように、実際的な奉仕でイエスの使命を支えていた婦人たちもいます。（ルカ8・2～3、マルコ15・41参照）ある者はキリストからはっきりとした呼びかけを受けました。その中から十二人に特別な場所が用意されます。

呼びかけを受けた人々は次のように様々でした。漁や収税に従事する人々、正直な人や罪人、既婚者や独身者、貧しい人やアリマタヤのヨセフのように裕福な人、男性もいれば女性もいました。熱心党のシモン（ルカ6・15参照）、つまり反ローマ主義者でローマに革命的に反抗する者さえいます。そして、キリストの招きを拒んだ者たちもいました。例えば、金持ちの若者はキリストの要求に対して悲しみ、さみしく去って行きました。「たくさんの財産を持っていたからです」（マルコ10・22）

### 弟子として求められるのは犠牲と完全な自己奉獻

2 イエスと同じ道を歩むための条件はわずかですが、根本的なことです。たった今読まれた福音書の言葉のように、過去に背を向けてきっぱり別れを告げ、深い意味での回心（メタノイア）、つまり心と生活を変えることが必要です。キリストが提案するのは、狭い道、犠牲と完全な自己奉獻の道です。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マルコ8・34）これは苦しみと迫害のとげを含む道です。「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。」（ヨハネ15・20）それはキリストの言葉を宣べ伝え、証しする道ですが、キリストの使徒にこう要求します。「旅には…何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず」（マルコ6・8、マタイ10・9～10参照）

3 ですから弟子の身分は、平坦な道を行く簡単な旅路ではありません。次のような困難な時もあるでしょう。「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。」（ヨハネ6・66）イエスは決定的な質問で十二人に挑まなければなりません。「あなたがたも離れて行きたいか」（ヨハネ6・67）他の場面でペトロがキリストの受難の話に反抗した時、イエスはすぐにおしかりになりました。原文のニュアンスによるとその時のイエスの言葉はもう一度ご自分の後に続くようにという招きとなるものでした。ペトロが十字架の実現を拒むと、こうおとがめになります。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」（マルコ8・33）

裏切りの危険がペトロを待ち伏せることになりましたが、最後には最高に寛大な愛をもって主イエス・キリストに従うのでした。実際にペトロはティベリアス湖畔で愛を誓うことになりました。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」そしてイエスは、「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現わすようになるか」を示そうとして二度繰り返されます。「わたしに従いなさい。」（ヨハネ21・17、19、22）

弟子としての身分は、愛すべき弟子ヨハネに特別な方法で示されます。ヨハネはキリストと親しく付き合い、キリストの母を預けられ、キリストの復活を見届けたのでした。（ヨハネ13・23～26、18・15）

～16、19・26～27、20・2～8、21・2、7、20～24  
参照)

### 十字架はキリストの弟子の紋章

4 弟子が目指す最終的な目標は栄光です。この目的に到達するための一つの方法は、「キリストを真似る」ことです。キリストは、愛に生き、愛のために十字架上でお亡くなりになりました。弟子は、「いわば自分の全存在をあげてキリストの内にはいらねばなりません。自分を再び見いだすために託身と贖いのすべての真理を受け入れ、自分のものとしなければなりません。」(「人間の贖い主」10番)キリストは人間の自我に入り込み、利己主義と自尊心から人間を解放してやらなければなりませんでした。聖アンブロジウスはこの点に関してこう述べています。「キリストが人間の魂にお入りになり、人間の心におとどまりになりますように。徳の神聖な幕屋

のいかなる場所にも罪が入り込まないために。」  
(Psalm118注解,letter “daleth”,26)

5 十字架は愛と完全な自己奉獻のしるしであり、栄光のキリストと一つになるために呼ばれた弟子の紋章です。東方教会の教父ロマーヌスは、素晴らしい詩人で作曲家でもあります。このように弟子に挑んでいます。「あなたはむちとして十字架を持ち、十字架の上にその若さを休ませなさい。祈りに、食卓に、寝床に、その他、栄光を求める時はどこへでも十字架を運び入れなさい。今や一つになっている配偶者にこう告げなさい。私はあなたの足元に身を投げます。あなたの無限のあわれみによって、あなたの世界に平和を与え、教会を助け、牧者を気遣い、会衆を一致させてください。こうして私たちは永遠に復活の歌を歌うこととなるでしょう。」(賛歌52「新受洗者へ」、19と22)

(2000.9.6)

## 悔い改めを求め続ける神

[聖三位一体について18回目の要理講話。]

1 詩篇作者は歌います。「あなたはわたしの嘆きを数えた」(詩篇56・9)この短く極めて重要な一文には、不快で墮落した不毛の砂漠をさまよう人間の歴史が含まれています。罪によって人間は、世界のみごとな調和を破壊しました。人間が破壊した世界は、初めに神が創造されたものでした。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めてよかった。」創世紀の有名な一節に示される通りです。(創世紀1・31)しかし神は、決してご自分の被造物から遠く離れていらっしゃるのではなく、反対にいつも人間の奥深いところにおられます。聖アウグスティヌスがこのことを良く理解しています。「その時あなたはどこにいたのですか。わたしからどれほど離れていたのでしょうか。わたしはあなたから遠く離れてさまよっていました。...しかしあなたはわたしの最も高い部分よりも高く、わたしの最も奥深いところより深い方でした。」(「告白」3、6、11)

しかしながら詩篇作者は、人間の創造主からの無益な逃走を見事な賛歌で表わしています。「どこに行けばあなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも、あなたはそこにもいまし、御手をもってわたしを導き、右の手をもってわたしをとらえてくださる。わたしは言う

『闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。』闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち、闇も、光も、変わる場所がない。」(詩篇139・7～12)

### 回心とは精神と心の根本的な変化

2 目の前から消えてしまう反抗的な息子を捜し求めるとき、神は教鞭に愛をもって捜し出そうとなさいます。神は御子イエス・キリストを通して遠回りの罪人の道をお通りになります。御子キリストは歴史の舞台に現われ、「世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1・29)として姿を現わされます。初めて公にお話しになった言葉はこれです。「悔い改めよ。天の国は近づいた。」(マタイ4・17)重要な点を言葉と行ないでイエスは繰り返し説明なさいます。「悔い改め」(ギリシア語でメタノイテ)、すなわち「メタノイア(回心)をする」とは精神と心を根本的に変えることです。必要なのは、悪から離れ、正義と愛と真理の国に入ることです。

ルカが福音書の十五章でまとめたたとえ話の三部作は神の憐れみに関するもので、最も胸を打つ描写です。そこでは、罪深い被造物を神がいかに積極的に捜し求め愛を込めてお待ちになるかが描かれています。悔い改めと回心を通して人間は放蕩息子のように立ち返り、決して人間を忘れたり捨てさることのない神を抱擁するのです。

3 罪を抱える息子に豊かな愛を注ぐ父親のたとえ話についてのコメントで、聖アンプロジウスは聖三位一体の存在を提示します。「起き上がって教会へ急げ。そこには御父と御子、聖霊がおられる。神は急いであなたに会いに来られる。あなたが心の中でひそやかに考えているのが聞こえるからだ。そしてまだ遠くにいる内に、神はあなたを見つけて走り始める。神はあなたの心をご覧になり、誰もあなたを引き留めないよう走り出る。さらに神はあなたを抱擁し、首に腕を回して、地に横たわっているものを拾い上げ、罪の重荷に圧迫されて地上の物を見ている人が再びそのまなざしを天に向けることができるようになさる。そこで創造主を求めるべきだったのだ。キリストはあなたの首に腕を回される。キリストは奴隷のくびきを取り除き、優しいくびきを置きたいのである。」(ルカによる福音書、注解VII,229-230)

4 人はキリストと出会うことによってその生き方が変わりますが、これは最初に聞いたザケオの話で教えられた通りです。イエスが罪人に会うとき同じことが起こります。十字架の上では、悪事を働いた者に対して赦しと希望が極端なまでに示されます。その悪人は命と死の最後の境界線に至ったとき悔い改めて仲間こう言うのです。「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだ」(ルカ23・41)「あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください。」という懇願に対してイエスはお答えになります。「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」(ルカ23・42~43参照)こうしてイエスの地上での使命は、神の国に入るため悔い改めを招くことで始まり回心と神の国に入ることによって幕を閉じます。

5 使徒たちの使命もまた回心への熱心な招きによって始まりました。ペトロの最初の話聞いた人々は心を打たれ、心配してこう尋ねました。「わたしたちはどうしたらよいのですか」ペトロは答えて言いました。「悔い改めなさい。(メタノエサテ) めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」(使徒言行録2・37~38)ペトロの答えは即座に受け入れられ、「三千人ほど」が

その日に回心しました。(使徒言行録2・41参照)足の不自由な男を奇跡的に癒した後、ペトロは再び人々に忠告しました。エルサレムに住む人々に自分たちの恐ろしい罪を思い起こさせます。「聖なる正しい方を拒んで、... 命への導き手である方を殺してしまいました」(使徒言行録3・14~15)しかし、ペトロは人々の罪に対する苦しみと和らげてこう言います。「ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、無知のためであったと、わたしにはわかっています。」(使徒言行録3・17)それから回心と呼びかけるのでした。(3・19参照)そして広大な希望を与えます。「神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださいました。」(3・26)

### 希望の扉はいつも罪人のために開かれている

同じ方法で、使徒パウロは悔い改めを述べ伝えました。アグリッパ王へ語ったときも、自らの使徒職を次のように言い表わします。私はすべての人々、「そして異邦人に対して、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。」(使徒言行録26・20、1テサロニケ1・9~10参照)パウロは教えます。「神の憐れみがあなたを悔い改めに導く」(ローマ2・4)黙示録においては、繰り返し悔い改めを求めるのはイエスご自身です。愛によって動かされて(黙示録3・19参照)、その勧めは力強く、悔い改めの緊急性を余すところなく表わしています。(黙示録2・5、16、21~22、3・3、19参照)けれどもイエスの勧めには救い主との深い交わりへの約束が伴っているのでした。(3・20~21参照)

したがって、希望の扉はいつもすべての罪人に開かれています。「人は試みを受ける時、独りではありません。実にたびたび挫折感を与えられる方法で天国に昇ることを不可能に思わせる試みの時、独りではないのです。栄光の身体、最も聖なる人イエスの御体があるところで、神性さと人間性が、決して引き離されることのない抱擁を通して出会います。みことばは肉となり、罪以外何もかも私たちのようになられました。イエスは人間の病んだ心に神を注ぎ、御父の霊を吹き込まれ、恩恵によって神となれるようになさいます。」(Orientale lumen15番)

(2000.8.30)

## 主イエス・キリスト

[日曜日のごミサの中でのお話。教理省宣言「ドミヌス・イエズス」(主イエス)、イエス・キリストと教会の唯一性と救いの普遍性について。]

祭壇の栄光に上げられた聖人たちが今日、私たちを駆り立て、キリストにまなざしを向けるよう促します。聖人たちの生活は、人類の救い主キリスト、

神のふところにおられる御独り子、父である神をお示しになる御方を基としていました。（ヨハネ1・18参照）聖人たちは私たちに、喜んでキリストに答えるよう、また心からキリストを愛し、キリストを証しするよう招いています。

「主イエス」は、大聖年の真只中に私が特別な形で承認した宣言です。この宣言をもってすべてのキリスト者にお勧めしたいことは、信仰の喜びをもってキリストへの忠実を新たにし、御子は、今日も明日も「道であり、真理であり、命」（ヨハネ14・6）であることを一致して証しするということです。キリストは御父のみ顔を示す御独り子であるという告白は、横柄に他の宗教を見下すようなものではありません。むしろ何の功德もない私たちに自分をお示しくださったことへの喜びに満ちた感謝なのです。ご自分をお示しになると同時にキリストが私たちに願っておいでになることは、受け取ったものを与え、与えられたものを伝え続けるということです。なぜなら、与えられた真理と神そのものである愛は、すべての人のものだからです。

使徒ペトロと共に、「ほかのだれによっても、救いは得られません。」（使徒言行録4・12）と告白します。第二バチカン公会議の教えに従う「主イエス」という宣言は、この告白が非キリスト者の救いを否定しないことを示し、キリストにおける究極の源を指し示しています。キリストにおいて神と人とは一つになるのです。神はそれぞれの霊的物的状況に合わせて、すべての人に光をお与えになり、キリストがご存じの方法で救いの栄光をお与えになりま

す。（「主イエス」VI,20-21）この文書は、本質的なキリスト教の要素、つまり対話を邪魔するものではなく、対話の基盤を示すものを明らかにします。なぜなら基盤のない対話は、空虚な言葉に落ちて行くことになるからです。同じことが、エキュメニカルな問題にも当てはまります。第二バチカン公会議と共に、この文書が、「一つのキリストの教会がカトリック教会のうちに内在している」と宣言することによって、他の教会や教会共同体をあまり考慮していないと表明する意向があるわけではありません。この確信に伴っているのは、救いは人間に功德があるからではなく、神の忠実さをしるすものであるという認識です。神の忠実さのしるしは、四旬節の始めに神のみ前で告白される人間の弱さや罪よりも強いものです。カトリック教会の苦しみは、文書が伝えているように、貴重な救いの要素を持つ地方教会や教会共同体が、カトリック教会から離れているということです。

したがって文書が再び示していることはエキュメニズムへの同じ熱意であり、それは回勅「キリスト者の一致」の基礎となっているものです。私にとって大切なこの宣言が、多くの誤った解釈の後、真理の明示という役目を果たし、同時に（対話を）開いていくことを望んでいます。マリアの助けによって、全人類の救い主キリストに対する私たちの信仰が成長しますように。十字架上の主は、すべての人の母としてマリアを私たちに委ねになりました。キリストがすべての人にお与えになった救いという希望と、神の子供たちのしるしである愛のうちに。

(2000.10.1)

## 人間の尊厳

〔臓器移植会議参加者へのお話。〕

1 (….) この国際会議で皆さんをお迎えしていることを喜んでます。この会議は複雑で微妙な臓器移植という問題について共に考える場となりました。(….)

この会議に温かく迎えてくださったことを感謝しています。皆さんが教会の道徳的教えに専念し、この会議で真剣に考えてくださったことにも感謝します。科学に対する敬意をもって、とりわけ神法に注意を払いながら、教会はただただ人間の完全な善を捉えています。

臓器移植は科学が人々に貢献するための大きな一歩です。そして今日、多くの人々の命が移植によって救われています。臓器移植の技術はますます高まり、医療の第一の目的、つまり人間の命を助けるための有効な手段となっています。だからこそ、回勅「生命の福音」で「純粋な命の文化」を育てる方法

の一つは「何の希望もない病人に健康を取り戻し、場合によってはいのちを永らえる機会を与えようとして、倫理的に認められる方法で実施される臓器の提供」であることを示したのです。(86番)

### 医療は人間の本性を尊重する

2 人類の進歩と共に、医療科学のこの特別な分野は多くの人々に健康と生きる希望を与えていますが、同時に重大な問題を提示しています。私たちは見抜く力をもって人類学的倫理的に照らされながらその問題を考える必要があります。

医療科学のこの分野においても、基本的な基準は、人類になくってはならない善の防御と進歩におかれなければなりません。そして、人間であるがゆえに私たちのものである、唯一の尊厳を保つことで

す。結果として、人々に行なわれた医療行為が限界にさらされていることは明らかです。技術的可能性の限界というだけでなく、人間の本性への尊重が決定する境界を医学は越えようとしているのです。このことは次のように完全に理解されています。「技術的に可能であるからといって、それが倫理的にも認められるということにはならない。」（「生命のはじまりに関する教書」4番）

**3** 他の機会でも述べましたが、まず初めに強調すべきことは、臓器移植は偉大な倫理的価値の決定、つまり「報いを求めず、他人の健康や幸せのために体の一部分を捧げるという決定」（「臓器移植会議参加者へのお話」3番、1999.6.20）を原点に行なわれるということです。臓器移植ははっきりとした気高い意思表示であり純粋な愛の行為です。臓器移植は単に自分のものを与えるというだけでなく、自分自身の何かを与えることでもあります。「人間の肉体は、本質的に靈魂と一体であるがゆえに、単に組織や臓器や機能の結合したものとして考えたりすることはできず、…むしろ、人間の肉体は人格の構成要素であり、人格はその肉体を通して自らを表現するものである。」（「生命のはじまりに関する教書」3番）

したがって、人間の器官を商品にしたり交易や商売の品物として見なす行為は道徳的に認められないことだと考えなくてはなりません。なぜなら「物」として体を用いることは人格の尊厳を犯すことだからです。

この最初の点によって、大切な倫理的趣旨である結論「知らされた上での同意」がすぐに引き出されます。明白な意思表示が「本物」であるために、医師は手術に関わる過程を的確に教える必要があります。患者が受け入れるか受け入れないかの立場を自由にそして慎重に表明するためです。提供者本人が意思表示できないときには親族の承諾が倫理的に有効となります。当然、提供された臓器を受け取る側からも同様の承諾が必要です。

#### 生命維持に不可欠な臓器を摘出するには 倫理的死の確定を要する

**4** 人類に与えられた尊厳を認めると、さらに基本的な結論が引き出されます。体内で個別に存在する生命維持に不可欠な器官は、死後において、つまり死が確実とされた人の体からのみ取り除くことが可能とされるという結論です。この必要条件はおのずと明らかです。死者以外からそのような臓器を取り出せば、意図的に提供者の死が生じることになるからです。このことは現代の生命倫理において最も議論される問題の一つとなりました。そして、死の事実を確かめる問題は一般の人々にとっても深刻な関心事となっています。一人の人が死に至ったと完全な確信をもって判断されるのはいつなのでしょう。

このことについて役に立つのは、人間の死が唯一の出来事だということ思い出すことです。死とは人間人格という単一で統合されたものが全面的に崩壊することです。死は命の根源（靈魂）が人間の体という実体から分離した結果生じます。人間の死は、この根本的な意味において解釈されるものであり、いかなる科学技術、実験的な方法も死を直接確認することはできません。

しかし、人間の経験が示しているように、いったん死が生じたら、生物学的な徴候が必ず引き続いて起こります。ますます精密さを増す医学は死の徴候を認めることができるようになりました。これが意味することは、医学が今日用いている死を確かめる「基準」によって、人間の死の瞬間を科学技術が決定するというものではありません。むしろ、人が確かに死去したという生物学的徴候を確認する科学的に精密な手段であると考えべきです。

**5** 良く知られていることですが、ある時期死を確認する科学的アプローチは、判断の中心となる点を従来の心臓呼吸の徴候からいわゆる「神経学的」基準に変えてきました。もっと正確に言えば、死の判断基準を脳全体の活動（大脳と小脳と脳幹）の完全で徹底的な停止を証明するところにおくということです。これは国際科学学界が考えている明確で決定的な判断基準です。ですからこの基準は、人間が生きるために必要な最低限の能力を失ったしるしとみなされます。

死を確認するために今日用いられている基準については、「脳に関わるしるし」が従来の心臓呼吸の徴候のどちらにしるし、教会は技術的な事柄に関する決定をしていません。教会は福音的義務を果たすにとどまります。すなわち、医学のデータと人間の一体性に関するキリスト教的な理解とを比較して、両者の相似点と人間の尊厳を傷つける危険となる点を明確にします。

ここで言えることは、新しい死の確認方法、つまり完全で徹底的な脳の活動の停止を死とする考え方を採用する基準は、健全な人間学の本質的要素と矛盾しないように思われるということです。したがって、医療の仕事に専門とする人々は死を確認する責任がありますが、この基準をそれぞれの場合に用いることができます。この基準は倫理的な確信を得るための土台と考えることができ、「まず間違いのないこと」として道徳が示すものでもあります。この道徳的確信は、倫理的に正しい行為と見なされるために必要な条件を十分に満たしています。そのような確信があるところでは、また説明を受けた上での合意がすでに提供者や提供者の正当な代理によって与えられているところであれば、臓器移植に必要な処置を行なうことは道徳的に認められることです。

**6** 倫理的に重要なこととしてもう一つの疑問があります。それは移植を望む人々が登録の順番に従って提供

された臓器を割り当てられるという点です。臓器提供促進の努力にもかかわらず、現在多くの国では医療が必要とするのに見合う臓器提供が得られているわけではありません。このことから、明確で適切に筋の通った基準にのっとったものとして臓器受容希望者の登録順を示すリストの作成が必要となるわけです。

### 公平であるべき臓器提供

道徳的見地からみて、正義の明確な原則が求めることは、提供された臓器を割り当てる基準が決して「差別的」（つまり、年齢、性別、民族、宗教、社会的地位に基づくもの）であったり「実用主義的」（仕事の能力、社会的有効性に基づくもの）であってはならないということです。そのかわり、誰が臓器移植手術を受けるか決定するとき、その判断は免疫学的、臨床学的要因に基づいたものでなければなりません。その他の基準はまったく独断的主観的なものになるでしょう。また、個々人の本質的な価値、外的状況とは無関係の、人間としての価値を認めないことにもなるでしょう。

7 最後の問題は、移植のために人間の臓器ではなく、その代わりとなるものを見つけ出すということです。まだ実験的な段階に過ぎませんが、それは他種からの移植、つまり動物からの臓器移植です。

このような移植についての問題を細かく探るつもりはありません。ただ思い出したいことは、すでに1956年ピオ十二世がその正当性への問題を提起したことです。それはピオ十二世が科学の可能性について述べたときでしたが、そのころ動物の角膜の人間への移植が予測されていたのです。ピオ十二世のこの反応は今日でも私たちを教え導くものです。だいたい次のように言われました。「他種からの移植が合法的なものとなるためには、移植される臓器がそれを受ける人の心理的遺伝的側面を害することがあってはならない。また、他種からの移植が生物学的に成功すること、受ける者が過度の危険にさらされないことが証明されなければならない。」（イタ

リア角膜移植協会、臨床眼科医への講演、1956.5.14 参照)

### 胎芽（受精卵）の操作と破壊は許されない

8 最後に、高等訓練を受けた多くの人々の働きによって、移植の科学的技術的研究が進歩を続け、臓器移植に代わる新しい治療の試みにまで及ぶよう期待を表明します。補綴学（義足などの人工的補充物の研究分野）における最近の進歩には期待が寄せられるように思われます。いかなる場合も、人間の尊厳や価値への尊重が損なわれる方法は常に避けられるべきです。人間のクローンを作るという特殊な実験は臓器移植を目的として試みられていることです。しかし、このような技術は、それが人間の胎芽の操作や破壊に関わっているかぎり道徳的に受け入れられるものではありません。たとえ目的自体が良いものであってもです。科学自体は他の治療的介入の方法を指し示しています。それはクローン実験や胎芽の破壊と関わるのではなく、例えば、むしろ成人から取った足の細胞を利用するといった方法です。すべての人々、胎芽の段階にいる者に対しても、その尊厳が敬われているかどうか見守らなければなりません。

このような様々な問題を述べるにあたって、哲学者や神学者の貢献は重要です。移植治療に関わる倫理的問題について注意深く十分に考えられた意見によって、どういった移植、どのような状況下であれば道徳的に受け入れられるかという基準がはっきりします。それは特に、一人一人の主体性を保護するためです。

社会、政治、教育界の指導的立場にある人々が、その献身を新たにし、寛大さと連帯意識の純粋な文化を促進すると確信しています。人々の心に少しずつ、特に若い人々の心に兄弟愛の必要性に対する深い理解を教える必要があります。臓器提供者となる決意として表われる兄弟愛の必要性についてです。

主が皆さんとその仕事を支え、本物の人類の進歩に役立つよう導いてくださいますように。この願いに祝福を添えます。

(2000.8.29)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

\* 電話受付時間は月・火曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00、

木曜日午前9：30～12：00、午後1：30～5：00となっています。